

第2章 音威子府村の概況

第1節 自然条件

第1 位置及び面積

本村は、上川総合振興局管内の北端に位置し、北東は宗谷管内枝幸町、北は宗谷管内中頓別町、北西は中川町、南は美深町に隣接し東西 22.2km、南北 18.6km、総面積 275.64 平方 km を有している。

村の中央を貫流する狭隘な耕地と、総面積の 86 パーセントを占める道有林、北海道大学研究林で形成されている。(北緯 44 度 43 分、東経 142 度 16 分、標高 40m)

2 地形及び土地利用

山岳地は東に北見山地、西には天塩山地が走っており、この両山地の中央を流れる天塩川が貫流し、北西部地域は段丘又は扇状地で平地は少なく、南東地域はやや起伏はあるものの、概ね扇状地となっており、平地の多くは畑地として利用されている。

3 河川

村内を流れる代表的な川は天塩川であり、河川・流域の概要は次のとおりである。

[天塩川：河川・流域の概要]

我が国最北を流れる大河川、天塩川は流域面積 5,590km²、幹川流路延長は 256km の 1 級水系である。その全長は北海道内では石狩川に次いで第 2 位、全国においても第 4 位となっている。その源を北見山地の天塩岳 (1,558m) に発し、山間急流部を西北流し名寄盆地に至る。さらに流域の士別市と名寄市で剣淵川や名寄川等の支川を合わせ智東の狭窄部を流れ、天塩平野を流下する間に多くの支川を集めて南下し、天塩町で日本海に注いでいる。

当流域は、上川・留萌・宗谷振興局管内の 2 市 9 村 1 村からなり、北海道北部の社会・経済・文化の基盤をなすとともに、多様な自然環境を有している。

第2 気 候

東西ともに約 50km でオホーツク海・日本海に達することから、海洋性気象に属し、四方山岳の囲まれた狭隘な盆地的地形のため寒暖の差が激しく、12 月から 3 月の平均気温は-6 度以下、6 月から 9 月は 17 度以上となり酷暑時期には 30 度以上を示す事もありますが、酷寒時期には-30 度以下になることもある。

また、道内でも有数の豪雪地帯で降雪量は 12m を超えることもあり、平成 10 年 11 月 18 日未明から 19 日にかけて積雪 135cm を観測し、11 月の積雪量で道内歴代 2 番目の記録となった。

第2節 社会条件

大規模な災害では、地盤や地質等の自然条件に起因する災害と社会的条件によってもたらされる災害が、同時複合的に現出する場合があります。被害を拡大する社会的災害要因としては、高齢化の進展、生活環境の変化、情報化社会の進展、住民意識の変化などが考えられる。

第1 高齢化の進行等による要配慮者の増加

本村の人口は、平成26年12月末の住民基本台帳人口において800人で、このうちおよそ3割（28.4%：226人）が高齢者となっている。

こうした高齢者を含む災害時の避難等に支援を必要とする避難行動要支援者や避難所等での支援等が必要な要配慮者が増加する中で、本村の人口は減少傾向にあるため、支援者の減少、高齢化が生じている。

そのため、要配慮者に対する早期の避難を促すためにも防災意識の普及、災害時の情報提供、避難誘導及び避難所等での支援等の取り組みも重要である。

第2 生活環境の変化

日常生活においては、電気、水道、ガス、電話等は必要不可欠のものとなっていることから、ひとたび地震が発生し、これらのライフライン等に被害が生じると、生活面での不安が増大し、心理的にも危険な状態に陥ることも予想され、社会的混乱の要因となる。

第3 情報化の進展

最近のIT技術の目覚ましい進展を背景として、公共機関、金融、流通機関等の情報システムは社会、経済及び生活の各方面に広く活用されているが、中枢管理機能の集積を促し、その機能に障害があれば、その影響は多方面に及び、被害が甚大なものに拡大するといった災害の広域連鎖を招く危険性を内包している。

第4 住民意識の変化

最近の世帯動向をみると、核家族世帯の増加に伴い、住民の地域的連帯感が希薄化している。こうした中で、東日本大震災等、近年の地震の多発により、災害時における隣近所同士や住民組織等の助け合いなど、住民の連帯意識の重要性が再認識されている。

第3節 災害の概況

本村では、過去の災害記録から、主な災害は、台風、集中豪雨等による風水害、融雪害、強風による火災、建物崩壊等が挙げられる。

参考までに、自然災害及び事故災害について、主に次のようことが挙げられる。

なお、主な災害の記録は、資料3のとおりである。

第1 冬から春にかけて

1 雪害

冬の降水は気温が低いためほとんど雪となり、積雪量は山間部が最も多く、2～3mにも達する。雪質は乾雪で密度が小さく、根雪期が長いことが特徴である。春先の融雪出水のほか、吹雪、雪崩等により、鉄道ダイヤの混乱、通行の途絶を招くほか、積雪による農期間及び植物生育期間の短縮は冷害の一因となっている。

2 洪水（融雪出水）

最北の地にある天塩川は、上流が南で北へ流下する寒地河川で、冬期間は結氷し春先は上流から融け始め、まだ結氷中の下流へモロミとなって流下する。この現象は天塩川特有のもので、氷詰りの異常水位となって、大きな水害をもたらしてきた。

融雪出水は、日本海側北部の河川特有の現象であるが、年間総流出量の40%～60%は4月から6月にかけて流出する。気温10℃、風速5.0m/sのとき1日に融ける雪の量は、雨量に換算すると45mm位といわれており、融雪出水は極めてゆっくりと長期間にわたって流出してくる。

その原因については、平地の融雪は徐々に河川に注ぐため急激な増水は起こさないが、土地を水で飽和させ、かつ排水溝その他小河川を漲らせ出水の素地をつくることになり、このような状態のところには山腹積雪が溶けて急速に注ぎ、平地の融雪によって貯えられた水とともに排水溝その他の小河川の流れを活発にして一挙に出水することなどが考えられる。

第2 夏から秋にかけて

1 冷害

夏の低温・寡照は、本村の農業に重大な影響を及ぼす。これは、夏季正常に発達すべき太平洋高気圧の勢力がオホーツク海高気圧に比して弱いと、北からの寒気が太平洋岸から入り込むことや、前線が停滞することにより低温、寡照となり、作物の生育や結実に支障をきたすこと等による。

2 洪水（夏季集中豪雨）

夏季の洪水は集中豪雨に起因する出水が多いのが特徴となっている。

強い雨が降るのは限られた期間で、それは、本州の梅雨が終わる頃の不連続線の北上する7月初めと、オホーツク海高気圧により寒冷前線の発生する7月後半、あるいはシベリア高気圧により寒冷前線が南下する8月下旬の3種類が挙げられ、これに低気圧や台風が伴うと更に雨量は多くなり、水害が発生している。

3 暴風雨災害

低気圧と高気圧が日本付近を交互に通って、天気は周期的に変化しやすく、また、台風の最盛期でもある。台風が本道に接近する頃は、この勢力が弱まっているのが普通であるが、時に勢力を維持して北海道へ接近し、甚大な災害をもたらす場合がある。

このような台風をはじめと**暴風雨**により前線を刺激して大雨を降らすことによる災害は、本村では8月～10月に上陸するものが影響するとみられる。

第3 通年

1 渇水被害

天塩川では過去、昭和51年、昭和55年、平成5年等、冬の積雪量不足や夏場の雨不足に起因する渇水被害をうけており、農作物へ重大な影響を及ぼしている。特に平成5年の渇水が深刻であり、7月雨不足により野菜をはじめとする農作物に被害がでるとともに、岩尾内ダムの貯水量が常時満水容量は3%まで低下する事態となった。

2 地震災害

天塩川流域が位置する北海道北部は全国的にも地震が少ない地域である。

天塩川流域では、流域内においてマグニチュード4以上の地震は記録に残っている限り、昭和43年7月17日に豊神（問寒別川上流）において震度5を観測したものが唯一である。

上中流部においては昭和7年2月1日音威子府で震度4が記録されているが、それ以外に震度4以上の地震は観測されていない。

資料編〔災害履歴・震度階級等〕 ・過去の災害の記録（資料3）